

異文化に暮らす日本人妻の適応と社会的ネットワークの意義

台湾なでしこ会を事例として

The Capacity for Japanese Wives to Adapt in Cross-Cultural Environments and the Importance of Social Networks: A Case Study of Nadeshiko in Taiwan

片 山 怜

Rei KATAYAMA

はじめに

近年、国際結婚の増加にともない、日本から配偶者の国である海外へと移住する日本人が増えている。中でも、女性の移動の方が男性より多い。1990年頃から、国外における日本人男性の国際結婚が減少しているのに対し、同時期における日本人女性の国際結婚は、逆に増えているのが現状である。

本稿では、台湾に住む日本人妻を研究対象とし、日本人女性が台湾人男性との結婚に至るプロセスとそのメカニズムを解明するとともに、異文化に暮らす日本人妻たちが、いかにしてホスト社会に適応しているかについて考察する。本研究の主な目的は、異文化間で結婚し、外国に移住する日本人女性の「出会い」のパターンと台湾において日本人妻たちが自ら築き上げてきた社会的ネットワークを解明することで、日本人女性の海外での活躍及び異文化適応のプロセスを理解するとともに、日本と台湾双方の文化の違いや社会の変動によって変化していく国際結婚のあり方を模索することである。

異なる文化の中に住む人々とともに生きていく日本人女性にとって、自分のアイデンティティを維持しながら、異文化にうまく適応していくためには、自分たちの社会的ネットワークを組織する必要があった。この社会的ネットワークの実態を解明することは、異文化で生活する人々の適応過程から問題点を見出すことができ、ひいては、民族間の摩擦や対立、偏見の問題に新しい視点を提供できることが期待できる。

研究対象の国際結婚相手国に台湾を選んだのは以下の理由による。台湾の高度成長と国際化に伴い、日本と台湾の交流が盛んにおこなわれるようになった。1980年代後半から、台湾では民主化が進展し、1987年に戒厳令が解除されたが、それから一気に台湾における日本ブームが到来した。まず、1990年代には民主体制が確立され、1993年に日本語及び日本のテレビ番組の放送が解禁になったのに続いて、映画、雑誌、キャラクターグッズなど日本のモノが大量に輸入されるようになった。こうして日本製品が出回る中で日本語ブームが起き、台湾各地で「地球村」、「世界村」、「科見」、「永漢」などといった日本語補習班ができたほか、台湾の大学でも相次いで日本語学科が新設されるようになった。また、こうした趨勢のなかで、日本に留学する台湾人が増え、一方で、台湾での日本語教育の需要の高まりと共に、台湾で日本語教師として働く日本人も増加している。

また、台湾では、台湾に居住する日本人妻が自ら組織した日本人妻の親睦会が各地にいくつも存在し、

その会員数が増えている。これは、夫台湾人・妻日本人のカップルが増加していることを意味する。1975年に日本人妻の親睦会「なでしこ会」が台北に発足したのを皮切りに、台中には「桜会」、台南には「南風」、高雄には「ひまわり会」と台湾各地に次々と日本人妻の会が発足している。その他にも、国際結婚家庭の居留環境の改善を目的に活動している「居留問題を考える会」や母親になった日本人女性のための母乳の会である「ねねの会」など、国際結婚し、母国ではない国で暮らすことになった日本人妻のよりどころとなる様々な組織が存在するのである。これだけ多くの組織を発足させたということは、国際結婚した日本人女性が増えているということ、そして、これから先も増え続けるであろうということを示唆している。

本稿では、日台間の人的移動に関する日本と台湾の政府統計データ、新聞雑誌記事の分析に加え、(1) 今回筆者が行った台湾人男性と国際結婚をした日本人女性のライフヒストリーの聞き取り調査、及び(2) 在台日本人妻の会「なでしこ会」での参与観察によって得た資料などの分析をもとに、台湾に居住する日本人妻の異文化適応における新たな展開について考察する。

1. 台湾における日本人の動向

まず、統計データから在台日本人の動態及び国際結婚によって日本から台湾に移住している日本人について、その特徴を明らかにしたいと思う。外務省が発表した「平成26年度海外在留邦人数調査」(表1)によると、2013年10月1日現在の全世界に在留する日本人総数は125万8,263人に上り、外務省が統計をとり始めて以来、過去最多となった。2007年に初めてアジア地域が北米地域を追い抜き首位に躍り出たのだが、2013年現在では、アジア地域の在留日本人数が占める割合は、29%(36万2,878人)にもなり、アジア地域の在留日本人数が欧米など他地域と比較して増加傾向にあるのは注目すべきである。

表1 2013年10月1日現在の国・地域別在留日本人数(アジア地域抜粋)

世界順位	国・地域名	総数	長期滞在者数	永住者数
2位	中国(香港含む)	135,078	132,243	2,835
6位	タイ	59,270	58,143	1,127
9位	大韓民国	36,719	29,905	6,814
11位	シンガポール	31,038	29,186	1,852
12位	マレーシア	21,385	19,713	1,672
13位	フィリピン	17,948	13,084	4,864
14位	台湾	16,797	15,054	1,743

出所) 外務省「平成26年海外在留邦人数調査」より筆者作成

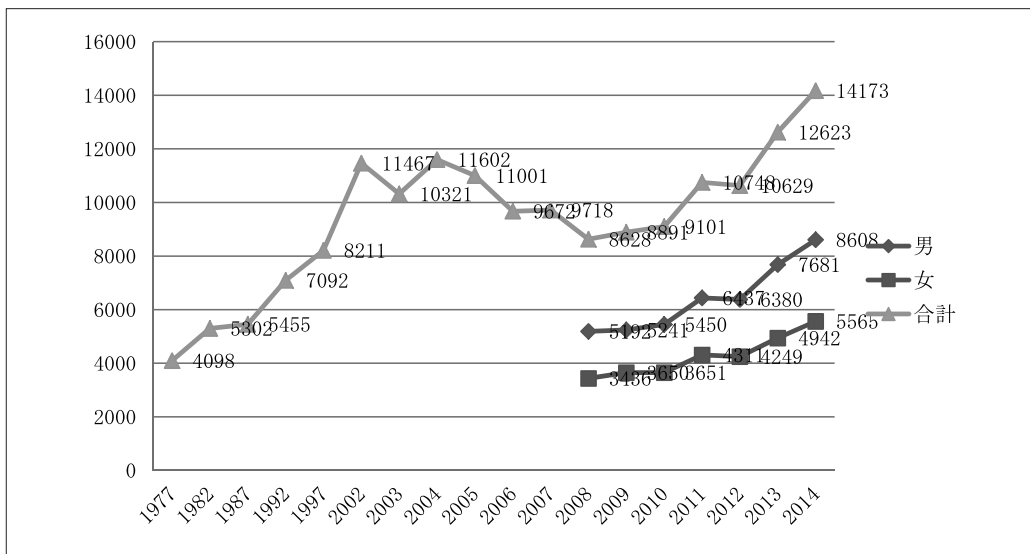
外務省の統計では、「総数」は日本国籍を有する者の数(長期滞在者及び永住者の合計)、「長期滞在者」とは3ヶ月以上の滞在者で永住者ではない日本人、「永住者」とは原則として在留国より永住権を認められている日本国籍保有者を指している。

アジア各国・地域における日本人総数の内訳をみると、「長期滞在者」の比率は中国(香港を含む)が高く、上海など中国大陸都市部において高い¹。これに対して、「永住者」数の比率は、フィリピン(27.1%)、大韓民国(18.6%)、台湾(10.4%)が高くなっている。これらの国・地域では、単に目先の仕事のためだけの滞在というよりは、比較的長期にわたって、現地社会に入りこんで生活している日本人が多いという傾向がうかがえる。

¹ 金戸幸子「アジア的自發性日本移民：以台北・上海為例」台湾・南華大學社會科學院亞太研究所《亞太研究通訊第四期》2006年 pp.63-87参照

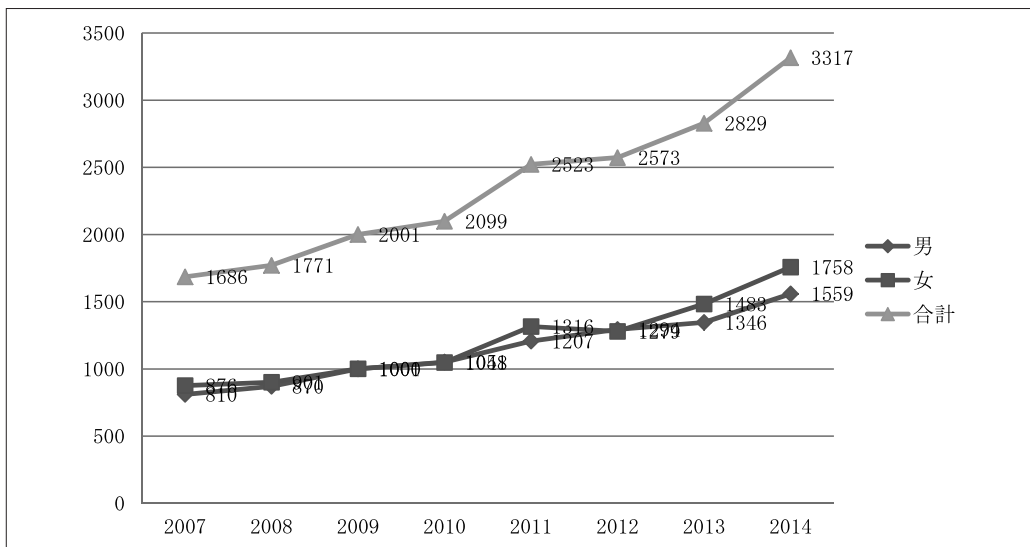
また、図1は、1977年から2014年現在における在台日本人数（外僑居留取得人数）の推移を示したものである。ここから、過去37年間という長いスパンにおいて、台湾に移住する日本人数の推移が見てとれる。1977年から2002年までは、勢いよく増加していたが、2003年3月に流行したSARSの影響により、一時減少している。2004年には再び回復をみせたが、翌年2005年から2008年までは若干の増減はあるものの、減少傾向にあった。そして、2008年3月に、日本アジア航空（JAA）とエア・ニッポン（ANK）がそれぞれ完全親会社の日本航空と全日空に統合され、日台航空路線が正常化したのを機に、翌年2009年から再び緩やかに増加し始め、2014年現在に至るまで増加傾向を示している。

図2は、2007年から2014年現在までの在台日本人配偶者数の推移を示している。男女別にみると、女性が男性のその数をわずかに上回ってはいるが、台湾の場合、国際結婚した日本人は、男女にあまり差がないというのが特徴だといえるだろう。とはいえ、やはり全体的にみても、男女別にみても、国際結婚をし、日本から台湾へと移り住む日本人は年々増えていることが明らかである。



出所) 内政部入出国及移民署全球资讯网 統計資料より筆者作成
 注) 2003年はSARSの影響で一時減少している。

図1 在台日本人数（外僑居留取得人数）の推移1977年～2014年



出所) 内政部入出国及移民署全球资讯网 統計資料より筆者作成

図2 在台日本人配偶者数の推移（2007年～2014年）

2. 日台国際結婚へのプロセス

日本統治時代以降、多くの日台結婚が行われ、現在では幅広い世代の国際結婚夫婦が台湾に住んでいる。台湾に暮らす日台間の国際結婚夫婦のうち、日本人は比較的女性が多かった。そして、彼女たちの出会いのパターンは時代によって変化し、それによって国際結婚のあり方や台湾における異文化適応の度合いも変化している。ここでは、今まで行われてきた先行研究と今回筆者が行った聞き取り調査をもとに、出会いのパターンが日台国際結婚のあり方や台湾での異文化適応にどのように関係してきているのかをみていくことにする。

2.1. 出会いのパターンと日本人妻の異文化適応

竹下修子²は、日台結婚のあり方が、台湾社会の変容や日台関係の変遷に影響を受け、世代によって多岐にわたる差異がみられることを明らかにしている。

竹下はまず、台湾における主な出来事に基づいて、時代を「日台国交断絶前（1971年以前）」、「国交断絶後から戒厳令解除前（1972年～86年）」、「戒厳令解除から台湾で初の総統直接選挙実施前（1987年～95年）」、「初の総統直接選挙実施以降（1996年以降）」に分類し、「政治優先の時期」、「経済成長期」、「民主化進展の時期」、「民主体制確立期」とした。そして、出会いのパターンを「知り合った国」、「どのように知り合ったか」、「知り合った当時の夫の職業」、「知り合った当時の妻の職業」の4つの面から、それぞれ時代によってどのように変化しているかを分析している。

竹下の調査によると、「知り合った国」に関しては、世代が若くなればなるほど、日本での出会いが減少し、第三国や台湾での出会いが増加しており、特に、第三国の増加が顕著であった。また、「どのように知り合ったか」については、1987年以降の「学校」での出会いが増加していることに注目している。そして、竹下は、第三国の学校で知り合うケースの増加について、中川昌郎の指摘³を基に、台湾人の留学先の変化および日本のバブル経済期以降の日本人女性の海外留学の増加と関係があると指摘している。

「知り合った当時の夫及び妻の職業」の調査では、夫・妻とも若い世代の方が学生の割合が高いが、日本で知り合ったカップルに限定してみると、1971年以前に結婚した夫の学生であった割合は比較的高かった。また、常用雇用者の割合は、夫・妻とも若い世代の方が低いが、妻の場合は台湾での常用雇用者が増加傾向をみせていた。つまり、結婚以前から妻が台湾に居住していた傾向が強く現れはじめることを意味している。

以上の調査結果をまとめると、以下ようになる。1971年以前には、夫が日本に留学あるいは仕事で滞在中に妻と知り合い結婚する傾向が強いが、1972年～86年頃からは、徐々に台湾で知り合い結婚にいたるというケースが増えている。1987年～95年頃になると、妻が仕事や留学で台湾に滞在中に夫と知り合い結婚するケースに加え、留学中に第三国で知り合い、結婚後、妻が台湾に移住するケースが増加する。そして、1996年以降は、第三国での出会いのパターンがさらに増加している。

このような結果から見ると、戒厳令が解除される1986年までは主に台湾人男性の国際移動により、日台間の国際結婚が生じていたが、1987年から現代にかけては、主に、日本人女性の台湾や欧米への国際移動が加わることによって、台湾や第三国で知り合うカップルが増加しているということがわかる。

以上から、出会いのパターンは人の移動のあり方の変化や社会環境の変化に影響を受け、時代とともに変化をすることが明らかになった。そして、このことがまた、日本人妻たちの異文化適応にも影響してく

² 竹下修子 「世代別にみる日台結婚の実態 - 台湾に居住する夫台湾人・妻日本人の場合」愛知学院大学 『教養部紀要』 (第51巻第1号) 2003年

³ 中川昌郎は、著書『台湾を見つめる眼』田畑書店、1992年、p20で台湾からの留学生数を1972年と1989年で比較し、台湾人の留学先が日本から他の国に移行したことを指摘している。

る。台湾人である夫と日本で知り合い結婚した日本人妻たちの中には、台湾に対する背景知識を持たずに結婚し、初めて台湾の地に足を踏み入れるという人も少なくない。このような要因も少なからず関係し、日本人の妻が台湾での生活に不適應を起こすケースも多かった。それが、近年では、結婚以前より台湾やアジアに興味を持ち、台湾に居住することを選択する日本人女性が増加し、また、日本での中国語学習経験を持つ人や中国語圏での留学や生活を経てから台湾に渡って国際結婚するに至った人も増えている。実際に、竹下の行った台湾での妻の適応と結婚満足度との関連についての研究⁴で、妻に北京語（または、台湾語）でのコミュニケーション能力があるほど結婚満足度が高くなるというデータが出ている。また、知り合った国が台湾であるカップルの妻が、日本や第三国であるカップルの妻よりも適應していると答えた割合が高いという結果が出ていることから証明できる。それに加えて、日台間の生活レベルの差が年々縮まっていることから、異国の地に嫁ぐ日本人女性が生活に不適應を起こすケースが以前に比べて少なくなっているようである。

2.2. 日本人妻の台湾へのイメージの変化

先ほど述べた出会いのパターンの変化から見てとれるように、台湾やアジアへと向かう女性の国際移動が顕著になっている。そして、台湾へ向かう日本人女性の増加の背景には、彼女たちが抱く台湾へのイメージの変化も関係している。ここでは、日本人が抱く台湾のイメージの変化についてみていく。

日本人の台湾に対する関心が高まったのは、90年代半ば頃である。日本において、それまで欧米に向いていた国際化は、経済的に急成長を遂げ、日本との関係が強まったアジア地域へと対象を移行し始めた時期だ。この頃から、大学などで第二外国語として中国語を選択する人が欧米言語を選択する人よりも多くなり、日本人の間でも中国語やアジアへの関心が高まった。台湾へと観光で訪れる日本人数が年間100万人を超え始めたのも、この時期である。そして、この頃から、日本人の描く台湾のイメージも不衛生な屋台や観光売春といった悪いイメージから、鼎泰豊の小籠包や台湾茶、変身写真など「リラックスできる癒しの場所」といった良いイメージへと変化してきた。特に、1997年以降は、台湾の日本人留学生の男女比において、女性が男性を上回るようになる⁵が、この時期から航空会社や旅行会社のパンフレットや広告、テレビ番組、雑誌などメディアの描く台湾のイメージが、タピオカミルクティーやアジアンスイーツなど女性向きに変化してくるようになる。このように台湾に対するイメージが良い方向へと変化したことが、日本人女性を自発的に台湾へと足を運ばせる原動力になっている。

1987年に台湾人男性と結婚し、台湾で暮らす日本人女性 W さん（61歳）は次のように語る。

私が台湾に嫁いだ頃、日本はバブル絶頂期でね、日本にいれば安泰と思われていた時期でしょ、アジアはやっぱり遅れているって思っていたの。台湾というとあまりいいイメージはなかったわ。親は心配していたし、友人からも、「台湾ってどこにあるの?」とか「台湾はすごく汚いって聞いたけど大丈夫なの?」と言われて。今は、日本の方が心配されているでしょ。台湾のイメージもだいぶ変わってきたわね。どんどん発展してきているし、台湾にいる方が安泰ってところかしら。最近では、友人も「台湾っていいところみたいね」とか、「食べ物すごく美味しいってきいたわ、私も言ってみよう」なんていうようになったのよ。

以上の聞き取り調査からも、日本人の台湾に対するイメージは暗くて未開の地といったような悪いものから、女性に優しい癒しの場といった良いものへと変化していることがみてとれる。また、そのことによって、台湾を訪れてみたいと思う人も増えていることがわかる。このように、日台関係の変化や日本人

⁴ 竹下修子 「国際結婚カップルの異文化適応と結婚満足度 - 台湾に居住する夫台湾人・妻日本人の場合」『金城学院大学論集』（社会学科編44） 127-137, 2001年

⁵ 参考資料：教育部統計處「中華民國教育統計 民国94（2005）年版」

の持つ台湾イメージの変化もまた、台湾に嫁ぐ日本人女性を増加させることに繋がっているのである。

3. 日本人妻の社会的ネットワーク

これまで、日台国際結婚における出会いのパターンの変化や日本人妻の台湾へのイメージの変化から女性の移動が顕著になっているということ、そして、これらが、異文化適応にも関係しているということを述べてきた。

本章では、異文化に適応するために彼女たち自身が築きあげてきた社会的ネットワークについて見ていくことにする。

特殊論的な日本人論において、杉本・マオア(1995, p.198)は次のように述べている。「人間関係のレベルでは、日本人は集団志向的である」とし、「自らの属する集団に献身する グループイズム が、日本人同士のつながり方を特徴づける」。これは、異文化コミュニケーション研究において使用されることがある言説であり、海外における日本人の特徴であるともいえる。

はじめに記述したように、台湾では、台湾に居住する日本人妻が自ら組織した日本人妻の親睦会が各地にいくつも存在する。これもまた、杉本・マオアの日本人論において提示される日本人像を映し出すものであるといえよう。異文化において、一から人間関係を築いていかなければならない日本人妻にとって、これらの親睦会やアソシエーションはなくてはならない存在であり、台湾で暮らしていく上で必要な情報収集の場であり、他の日本人妻たちとの親睦を深める場でもある。台湾においても、日本人は集団となり、互いを助け合うわけである。

また、S.ケラーが、近辺に親族がいない場合に近隣関係や友人が登場してくるという「親族関係補完仮説」[Keller 1968: 33 - 34]を提起しているほか、菅谷よし子は、長距離の移動によって接触が困難になった近親の代替者として近隣や友人が、前住地で近親が担っていた機能を肩代わりする「疑似親族」が形成される[菅谷 1980: 83 - 84]としている。以上の先行研究から、日本人妻たちは日本の親族や友人といった既存のネットワークの損失を補うという意味でも、台湾という異国の地において新たな社会的ネットワークを形成していると想定される。

3.1. 「なでしこ会」の歴史と変遷

まず、国際結婚し、台湾で生活することになった日本人妻たちが自分たちの力で築きあげた「なでしこ会」という社会的ネットワークの実態を解明するために、「なでしこ会」の活動内容、及び、どのようなきっかけで発足し、今もなおその活動の幅を広げているのかといった組織の沿革についてみていく。

日本人妻の親睦会である「なでしこ会」は、2014年5月現在、会員147名にも及ぶ大きな組織である。宗教やイデオロギー的なものにとらわれない純粋な親睦をめざし、今なお発展し続けている。そして、長く経験を積んだ先輩たちの体験に学び、後輩の相談にのるという世代を超えた交流をはかる場であり、また友人を探す貴重な場であるというのが、この日本人妻のネットワーク組織の主な目的であるという。現在では、リーダー、会報係、会計係、事務係、渉外担当者などといった役職ができています。そして、このように組織化が徹底してからは、企画を役員以外も含めた会員全員で行うようになり、参加者全員の意見を尊重できる組織となった。毎月一度の例会当番は会員全員が月ごとに分担して受け持つ⁶ようになり、そういった企画連絡を通して、つながりを作っていくようになったという。近年では、人数も増え、毎月約7名一組2年に一度の割合で当番が回ってくるようだ。そして、毎月の当番の主な仕事は、例会の企画、案内の作成、出欠確認、当日食事代等の集金、記録帳に当日の場所や人数、感想などを記入することであ

⁶ 但し、70才以上の方は免除される。

る。主な活動内容としては、食事会を中心としたものだが、講演会、講習会、バザー、ボランティア活動などが挙げられる。また、2、8月は夏と冬の休み月で例会は休みとなっているようだ。

1975年8月に発足したこの組織はもともと、街で出会った7人の日本人妻たちが、月一度の親睦を目的とした食事会「大根の会」を発足させたことに起源する。それから、幾度かの食事会を通して、年々その規模を拡大していった。1984年1月には、責任者として梅村京子さんを選出し、当時の会員数は45名となった。1985年1月、「大根の会」を「なでしこ会」と改名し、その5年後には、はじめて役員制を導入し、会長以下6名を選出するに至った。その内訳は企画、会報、事務、会計であり、この年から、会報の発行及びボランティア活動を開始した。1991年1月には、梅村さんの考案により、写真入り名簿が作成されたが、そこには名前や年齢、そして日本の出身地や台湾での住所が載せられているため、なでしこ会の会合以外でも個人同士の交流がしやすくなった。これを機に、2年に一度、業者に依頼し、写真入りの名簿を作成するようになった。この年、会員数は86名に達した。同年12月には、日僑協会会報「さんご」に「なでしこ会」の紹介記事が連載され、「なでしこ会」の認知度が上がり、1993年8月にはNHK大阪の取材を受けるまでになる。これは戦前より在台している日本人妻の取材を目的としたもので、なでしこ会の活動等が収録され、同月関西及び沖縄ネットワークで報道された。1995年2月には、1月17日に日本で起こった阪神・淡路大震災に義援金として、61,800円を寄付するなど、祖国日本が大変なときには何かできることはないかと考え、この「なでしこ会」というネットワークを通して援助を行ったのだ。これら義援金は、日僑協会を経由して日本赤十字へと渡った。また、この時点で、会員数は100名を超えた。同年12月、梅村京子さんが会長就任10周年を終え、会長引退を宣言し、その後「相談役」にまわった。1996年には、会員へのアンケートをもとに、お見舞いやお祝いについての内規を簡素化し、さらに会費を500円に値上げした。また、危険時に対応するための緊急連絡網が使用され始めた。1997年7月には、中国時報と読売新聞香港版に「なでしこ会」が連載されるなど、海外にもその名が知られるようになった。この時期から居留問題に目覚め、第一回のミーティングを行い、会報の内容を充実させるために尽力したという。1998年、会に渉外係を置いて、積極的に居留問題に取り組み、公聴会を開くに至った。この頃から内輪のみの活動ではなく、外部ネットワークとの交流や協力を行うようになることがみてとれる。1999年には、「学校情報交換会」を開き、台湾各地の学校に関する情報の交換を行い、自分たちだけでなく、子どもたちにより良い生活を提供し、またより良い教育を受けさせるために尽力した。同年の9月21日に台湾中部の南投県集集付近で大地震が発生したが、この時も、会から行政院に義援金を送ったり、バザーの収益金などを台中の親睦会や日本人学校にお見舞いとして寄付したりした。ここで再び、緊急連絡網の入った名簿を作成し直したという。この時点での会員数は152名であった。そして、発足から25年経った2000年1月、なでしこ会25周年記念パーティーが開催され、多くの来賓ならびに会員が参加した。また、この年から5年ごとに30周年、35周年を記念するパーティーが開かれた。2001年には、「なでしこ会」ではじめて「日本の教科書」の申請を始めた。2003年、会長は日本人会の監事メンバーになった。そして翌年、ホームページを立ち上げ⁷、インターネットでの交流が加わり、また、この頃から、台湾人との結婚以前より、なでしこ会の存在を知り、会員を希望する日本人妻も増えた。2005年3月には、新潟中越地震、スマトラ沖地震被害地に義援金を送り、被災地への金銭的な支援は欠かさず行っている。2007年、日本人会監事をリーダーから渉外担当者へ変更することが決まり、外部との連絡をより一層増やし、連携を強化した。2008年4月、「なでしこ会」のメンバーによるピアノコンサートを台北日本語授業校と共に開催したり、10月にはバザー10周年を記念し、バザー会場にてお茶会を行ったりと、徐々に活動の幅を広げていった。2009年9月には、八八水災被災地への義援金119,000円を中華民国紅十字へ送った。2011年3月には、会報のメール配信(PDF配信)が導入され、定例会に参加せずとも、メールで会報を閲覧することができる

⁷「なでしこ会」台北日本人妻の会ホームページ：<http://www.geocities.jp/twnadeshikohp/>

ようになった。また、同年6月には、東日本大震災募金を、日本人会を通じて日本赤十字社に寄付している。2013年7月、歴代リーダー座談会を開催し、長年活動してきた「なでしこ会」のあり方について見直し、会員にとって会そのものをよりよいものにしていくための話し合いを行ったという。

以上、長期にわたって「なでしこ会」の動きをみていくと、日本人妻の親睦会である「なでしこ会」とはいえ、内輪だけの親睦会にとどまらないことは明らかである。講演会、講習会、バザー、ボランティア活動等、様々な活動や取り組みを通して、外部ネットワークともつながっており、また、それらと協力して社会に貢献していることがみてとれる。そして、日本ならではの役員制を導入したり、会議等を通して毎年試行錯誤が繰り返されており、今こうして「なでしこ会」が存続しているのである。

3.2. 「なでしこ会」が日本人妻たちにもたらす影響

ここでは、今回筆者が行った「なでしこ会」の会員への聞き取り調査をもとに、「なでしこ会」が、台湾に暮らす日本人妻にとって、どのような存在であるか、またどのように影響しているのかについてみていく。

2013年度「なでしこ会」リーダーであったWさん(61歳)は、34歳の時に、台湾人である夫と結婚することを決め、台湾に嫁いできた。夫とは日本の教会で知り合ったという。今から27年前である1987年、日本はバブル絶頂期であったし、その時の日本人から見た台湾に対するイメージはあまり良くなかったため、両親は台湾に嫁ぐことを懸念した。彼女自身も台湾がどういうところなのか何も知らないまま台湾に嫁いだため、当初は友人も知り合いも全くいなかった。台湾に来てしばらくして、「なでしこ会」という日本人妻のための親睦会があるということを知り、知人の紹介で入会した。入会の理由は、当時まだ少なかった友人や知り合いを増やし、台湾で快適に暮らしていくための情報を交換するためだとWさんは語る。話によると、最近はある程度知り合いができれば会を抜けるという人も少なくないという。しかし、Wさんの場合、住まいが市外ということもあり、毎月行われている定例会にはあまり参加できていないにも関わらず、なでしこ会にはずっと登録し続けたままだそうだ。彼女は、自分にとっての「なでしこ会」という存在は、安心感をもてる自分の居場所であり、なくてはならない存在であるという。一般的に言えば、定例会は日本人の奥様方の単なる交流の場であり、傍から見れば、ただの座談会だという人もいるが、Wさんにとっては、所属している場があるのとないのでは全く違うのだそうだ。異国の地に嫁ぎ、周りに親戚がない状況下において、日本人妻たちにとって、「なでしこ会」に所属しているという認識とそこに自分の居場所があるという安心感は絶大なものであるということがわかる。ここから、S.ケラーの「親族関係補完仮説」は成り立ち、また菅谷よし子の「疑似親族」を「なでしこ会」という存在が担っているということがうかがえる。

一方、2014年度「なでしこ会」リーダーであるOさん(35歳)は、大学を卒業してから就職が決まっていなかったため、台湾で貿易関係の仕事をしていた父の紹介で、26歳の時、初めて台湾に来た。そのため、特に好んで台湾にきたわけではなかった。今年で台湾に来て9年目だが、未だに台湾での生活に慣れず、不満を持っているようだった。台湾に来て、初めて外国で生活してみて、日本の良さを改めて感じるようになったのだそうだ。台湾人の夫とは台湾に来て一年半してから、友人の紹介で知り合った。当時日本語教師をしていたOさんは、日本語学校に通っていた夫と友人を介して知り合い、3年間の交際期間を経て結婚することになった。Oさんの場合、結婚する以前にすでに台湾で仕事をしていたこともあって、会社の同僚や知人など、友人関係にはそれほど困っていなかった。ただ、子どもが生まれてから、見知らぬ土地で子育てをする状況に遭遇して初めて、情報などを提供してもらえるネットワークの重要性を身に染みて感じたそうだ。そこで、台湾に住む日本人の母親たちためのネットワークである「ねねの会」に何度か参加し、そこで知り合った友人に「なでしこ会」を紹介され、入会した。入会して2年目でリーダーになったそうだが、半ば嫌々ながらの役員推薦であった、と彼女は語った。ここだけの話、来年には退会するとも話していた。彼女にとって「なでしこ会」とは単なる情報提供の場でしかなく、つながりや友人

を増やすといったネットワークを広げるという観念はなかった。

ここに、時代における環境の変化や日本人妻にとっての「なでしこ会」の存在意義の変化が見てとれる。Wさんの時代にはまだインターネットが普及しておらず、「なでしこ会」のような社会的ネットワークが非常に重視されていた。しかし、時代の流れとともに、簡単に人と知り合い交流することが可能となり、また、社会進出する日本人女性が増えたことで、今までとても重視されていた日本人妻のネットワークの存在意義が希薄になってきているというのが現状であった。

Wさんの話によると、定例会の案内は、昔はインターネットが普及していなかったため、すべて郵送だったという。そのため、大変ではあるが、役員は会員一人一人の状況を把握できており、会員も積極的に定例会に参加していたようだ。皆が協力し合って会が成り立っていたし、一人一人の絆も強かった。しかし今ではすべてメールでやりとりをするようになり、新しく台湾に住むことになった日本人妻たちはメールで簡単に質問をすることができるようになった。また、社会に出て活躍する日本人妻が増え、仕事をしながら会の役員をするのはかなり大変であり、最近では、若い人たちの加入が減少していたり、また、入会しても必要な情報を手に入れたり、あるいは、ある程度台湾の生活や環境に慣れるとすぐに退会する人が増えているという。以前に比べ、連絡は非常に便利になったが、わざわざ定例会に参加したり、役員として様々な催し物を考えたりしなくても情報が手に入るようになり、一人一人の関係が希薄になったことも、日本人妻たちのネットワークに対する存在意義の変化と結びつくのではないかと考えられる。

また、昔は、「なでしこ会」には、お世話役のような人がいたのだという。そして、その人がなでしこ会会員の状況を把握しており、新しく入ってきた会員に近くに住んでいる人や同じような境遇である人を紹介してくれていたため、「なでしこ会」は活発化しており、交流の場としてはとてもよく機能していたのだそうだ。しかし、今回の参与観察からは、それぞれすでにグループができおり、定例会では知り合い同士が固まって食事したり、座談したりしていた。また、定例会は毎回30人程度が集まるのだが、知り合い同士が誘い合って参加する風潮があるため、新しく入った会員がなかなか入っていけないような状態になってしまっていた。近年、若い人たちの加入の減少や入会后すぐに退会する人の増加は、以上で述べたような会自体の変化もその大きな理由のひとつであるといえるだろう。

以上から、時代の変化とともに、日本人妻たちの「なでしこ会」に対する存在意義は明らかに変化している。一人一人の絆が強く結びついていた頃の「なでしこ会」は、前住地で近親が担っていた機能を肩代わりする「疑似親族」を形成するという意味でのネットワークとして成り立っていたが、今ではその役割を担う存在ではなく、単なる情報の媒介としてのネットワークとなっているというのが現状であるといえるだろう。

4. 国際結婚と日台関係、そして今後の課題

本稿は、台湾に住む日本人妻を中心に、彼女たちが台湾人男性との国際結婚をするに至るプロセスとそのメカニズムを解明するべく、まず、先行研究から彼女らの「出会い」のパターンの変化について検討した。そして、このことは日本人妻たちの異文化適応にも影響していること、台湾へ向かう日本人女性の増加の背景には彼女たちが抱く台湾へのイメージが時代を越えて変化してきていることを記述した。また、異文化に暮らす日本人妻たちが、いかにして社会に適応しているかを明らかにするために、日本人妻たちが自ら築き上げてきた社会的ネットワークの歴史や活動内容から、日本人妻たちの台湾での活躍についてみていった。さらに、筆者の聞き取り調査を基に、日本人妻たちの社会的ネットワークに対する存在意義を明らかにし、それが時代とともに変化していることについて考察を進めてきた。

グローバル化が進行し、国境を越えて多くの異なる文化圏の人々との出会いが当たり前になり、国際結婚における人々の考え方や日本以外の国に対してのイメージも時代とともに変化してきている。まして

や、日本と台湾に関していえば、地理的にも、交通が便利になった今では、簡単に行き来できる位置にあり、歴史的に見ても、つながりの深い国同士であることは変わらぬ事実である。また、メディアが発達し、ポピュラーカルチャー等の影響により互いの国のイメージも良い方向へと変化してきている。このように、時代とともに、様々なものが流動し、絶えず変化し、変容している。その中で、国際結婚という一つの現象も多方面から影響を受けており、今回取り上げた「出会いのパターン」及び「社会的ネットワークの存在意義」以外においても、さらに検討しなければならない課題は山積みである。今後、また異なる新たな側面からの考察を行いたい。

主要参考文献

Keller, Suzanne, 1968, The Urban Neighborhood : A Sociological Perspective, Random House.

金戸幸子「アジア的自発性日本移民：以台北・上海為例」台湾・南華大學社會科學院亞太研究所《亞太研究通訊第四期》2006年

金戸幸子「現代日本人の台湾への自発的移住に関する研究 移住経験の聞き取り調査とその分析を中心として」2006年度 財団法人交流協会日台交流センター『日台研究支援事業報告書』財団法人 交流協会 2007年

菅谷よし子「地理的移動と第一次関係の形成」現代社会学会議編『現代社会学』7(2), 講談社: 66-93 1980年

杉本良夫, ロス・マオア『日本人論の方程式』筑摩書房 1995年

竹下修子「国際結婚カップルの異文化適応と結婚満足度 台湾に居住する夫台湾人・妻日本人の場合」『金城学院大学論集』(社会学科編44) 127-137, 2001年

竹下修子「世代別にみる日台結婚の実態 台湾に居住する夫台湾人・妻日本人の場合」愛知学院大学『教養部紀要』(第51巻第1号) 2003年